

英 語 科

1. 高一での英語学習指導

—— 中、高のギャップを埋めるために ——

山 本 岩 男

1. 高校1年生は中学4年生か

中学での週あたりの英語授業時間数は次の学習指導要領の改正で弾力的な運用がやっと認められることとなったものの、現状では3時間である。生徒にとって中学から高校へ学校が変わり、教師も変わるが、英語を学ぶという点では同じことのはずである。ところが実際には中学と高校では学習内容、指導方法がかなり異なっている。具体的の中、高併設の本校の場合中3と高1ではどのように異なっているかまとめてみた。

1988年度の例

項目	学 年	中 3	高 1
週時間数		3	5
教科書		New Horizon (東京書籍)	Pioneer English I (開拓社, 3時間) Essential English Grammar (増進堂, 2時間)
新出語+ 語句数		約 430	約 680 Pioneer English I
目 標		理解し、運用できるようにする	第一に理解できるように、第二に運用できるようにする (現実には理解しなければならない項目が多すぎて、運用練習まで高める余裕があまりない)
教授法		絵、写真、フラッシュカードを用いた口頭導入、口頭練習、対話練習、部分訳	文章の解釈、文法についての教師の説明および問答、作文
学習法		復習中心	予習中心

中学と高校では義務教育かそうではないとか、教育の目的なども異なっているが、生徒にとってみれば同じ英語を学ぶはずなのに、たった中3の3月から高1の4月の数週間足らずのうちに上のような変化を経験する。意欲の旺盛な生徒はむしろ克服してやろうという動機づけになるかもしれないが、入学者選抜におおはばに抽選制を取り入れている本校の生徒集団(詳しくは本校紀要第30集で倉田が説明している)にはそのような動機づけとなるよりも、意欲の喪失につながる一つの大きな要因であることを実感している。また、高校で上のような解釈、文法の説明中心で理解のレベルでとどまっている授業をした結果、たとえば関係副

詞 when の定着度は以前それが中学の教科書で取り上げられていた時と比べるとはるかに低く、基本的な項目の定着について高校での授業効率がきわめて低いことが東大附属論集27号で指摘されている。筆者は中学から高校にかけての英語学習の極端な変化を解消すること、基本的な事項の定着をはかることを目的として1988年度高校1年生を中学4年生という認識で英語Iの週3時間分の授業(リーダーと呼ぶ)を指導した。その報告と考察を以下に述べることにする。

2. 1988年度 高1リーダーの授業

年間を通じて指導する上での基本的な方針として次の4つを考えて実践に努めた。

- (1) 目標、課題を具体的にしめし学習しやすくする。
- (2) 音声重視した指導を行う。
- (3) 興味をもって学習できるようにする。
- (4) 単調な学習にならないようにする。

これらに基づいた年間の指導の内容が次のページの表にしめされている。まず(1)について、中学では教師主導でなされていた言語習得の学習を、高校では予習を中心に教師の直接の指導がない場面で独自に自主的に行い、学習量を増やすことができるように指導する時期だと考えて、学習方法の指導にじっくり取り組んだ。まず、4月の年度始めの3~4回の授業を8. 辞書(ライトハウス英和辞典, 研究社)のひき方、ノートのとりにあてた。これに関連して、単語、連語を理解し、運用できるようにすることを重視し、そのことを生徒にはっきりしめしつづ定着させるための練習をするために、2. フラッシュカードの使用、定期テストでの語彙問題の出題、4. 熟語集(高校基本英熟語200, 旺文社)にのっている熟語を用いたオリジナルの例文集の作成およびその定着度テストの実施を行った。

教科書の学習の手引きプリント(Study Guide)も(1)の方針にしたがって次のような工夫をした。(P. 78)

- A それぞれの課での学習目標、それにふさわしい学習方法を毎回説明した。
- B 意味、用法を理解し、運用できるようにしたい表現の例文をのせた。
- C 最低限辞書で意味、用法を調べるべき語(句)

年間の指導記録の概要

4月	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3
1. Study Guide, 2. フラッシュカード, 3. 予習チェック											
								4. 熟語集			
5. 発音練習				6. フォニックス				7. 暗唱			
8. 辞書 ノート指導				9. 歌				9. 歌			
10. ビデオ教材						10. ビデオ教材					
11. ジミー来校											
						12. 2学期予習		14. 3学期予習		14. 2年予習	
						13. サイドリーダー					

STUDY GUIDE 3 : BLUE JEANS

A

- 予習： 意味のわからない単語の意味を調べてノートに書く。ノートの左ページに英文をうつしておく。「絶対に訳せるようにする文」を訳しておく。その他の英文で意味のよくわからないところに印をつけておく。Study Guideの質問に答える。
- 授業： 訳の訂正。わからないところのチェック。
- 復習： 単語、熟語、暗唱文を覚える。予習段階でわからなかったことが理解できているか確認。

Goal 1 訳の要求されているところは細かく正確に訳す
 2 訳の必要でないところは訳さなくても心配しないように（これから英文をたくさん読むのにすべて訳していたら能率が悪い）

B

Sentences to learn by heart

- The man sat reading for a few hours.
- That's it.
- He wanted the tailor to make pants with canvas.

C

New words to look up in the dictionary

- p. 17 wear, wagon, step, bank, beer, saloon,
 p. 18 clothes, trousers, hole, canvas, tent, a pair of, slap

D

Sentences to put into Japanese

- p. 17 1. 2 Who were the first people to wear jeans?
 1. 9 The man sat talking on the steps outside.
 p. 18 1. 10 What for?

E

Points to be checked

- p. 19 1. 9 itは具体的に何をしめすか
 1. 11 He gave . . . canvas. の文型は
 1. 14 do that =

をしめし、その作業が確実にされているか、3. 予習チェックをした。

D 和訳すべき文を指定し、定期テストではそれら以外からは和訳問題は出題しないこととした。

E 文章を読み進めていく上でのポイントを質問形式でしめた。

(2)について、教科書の音読、準拠テープの聞き取りや定期テストでの10点分のヒアリングテストの他に表の5, 6, 7のような指導を行った。5. 発音練習は「英語の発音練習」(根間弘海, 大修館書店, 1986年)を基に、授業の最初の5分間ずつで英語の調音法の要点を一通り練習できるようにプリントを作成し、テープも編集して行った。6. フォニックスはそのルールを覚え、かつ発音、聞き取り練習をすることとして、やはり授業の始めの5分ずつで毎行行った。教材は「つづりと発音 [I]」(若林俊輔, 三省堂, 1986年)を用いた。12月から1月にかけての7. 暗唱ではキング牧師のI have a dreamの一部を全員に暗唱させた。12月の期末テスト終了から2学期終業式までの数回の授業の始めの10分間を用いてスピーチの内容とそれが行われた時の社会状況の説明と発音、リズム、ストレスに注意した練習をした。そして冬休み後の3学期最初の3~4回の授業で個別に全員の暗唱テストを実施した。

(3)について、平常の授業の中で自然に英語に興味を持てるように雑談のような感じの話をできるだけ多く取り入れた。たとえば、筆者の友人(外資系銀行員、自動車メーカー技術者および貿易業務担当員、大使館職員など)がいかに日常生活で英語を使用しているかを具体的に説明したりした。またニューヨークやロンドンの様子、米国の高校生活の様子などを紹介した。前にふれたStudy Guideにも漫画やクロスワードパズルをのせた。特別な活動として、オーディオ、ビデオに日常慣れ親しんでいることを考慮に入れ10. ビデオソフト(Going to New York City, To Elvis with Love)を用いてヒアリング、スピーキングの練習中心の授業を展開したり、9月、1月の学期始めの授業では9. Memory(この歌が挿入されているミュージカル「Cats」が名古屋で上演されている)やImagineの歌をプリントの歌詞の空所を聞き取る作業をしながら鑑賞した。5月にはJimmy Coxという米国少年を授業に参加させて、コミュニケーションの手段として英語を習得することへの動機づけをはかった。

(4)について、これまでの報告にあるような様々な活動を授業に取り入れたことにつけ加えて、教科書のそれぞれの課における新出文法項目、新出語の量、ストーリーの内容に応じて指導方法を変えた。具体的には速読教材や笑い話的な課では文法的な説明は一切行わず英問英答を行って、テンポよく文脈を把握させるこ

とのみに注意をはらった。やや難しい論理的な文章の課では全文を日本語にすることを要求したり、気楽に読めそうなエッセイでは文法的あるいは文章の要点をつかむ際に重要であると思われた部分のみ日本語による細かい解釈を要求し、その他の部分は要点を日本語や英語でまとめさせるにとどめた。なお日本語訳や日本語による説明をあまりしなかった部分については授業中に訳を求める生徒を納得させるために必要に応じて日本語訳のプリントを後で配布した。

3. 評価と反省

(1)アンケートについて

筆者は各年度の最後の授業でその年度中の指導(方法、内容)や副教材などについて生徒に無記名で評価させている。1989年3月に行ったアンケートとその集計の結果は次のページのとおりであった。全体的にはあまり極端な特徴が見られない。あえて上げるとすれば7スタディーガイドについての評価の平均が唯一4ポイント以上で、要点をつかむのに役に立ったと思われることと、9の暗唱が不評だったことである。数年前にもこの暗唱を課した時にはとても好評だったのになぜ今回はこのような結果になったのか理由はわからない。もっともなぜ暗唱しなくてはならないのかという不満は前回も今回もあった。2の項目では多様な意見、要望が集まり、だきただけそれらに応えられるように英語科教師全体で取り組んでいきたいと思う。特に、衛星放送による米国大リーグ、プロフットボール、音楽番組を利用した授業はぜひ平成元年度中に実現させたい。

(2)1年間をふりかえって

音声を重視し、いろいろなタイプの授業を行ったのは、基礎的な事項の定着をはかりつつ、教師主導型学習に慣れている中学4年生を、予習を中心とした自主的な学習ができる高校1年生に育てるためだった。しかしながら、予習の内容を指定しそれが確実にされているかどうかチェックしたことは過保護すぎて自主的な態度をむしろおさえたかもしれない。学習法の指導などは成績上位者にとっては当然わかっている、こちらがあまりにもていねいにしつこく指導するとむしろめんどうくさい、時間の浪費だという反応もあった。

いろいろな教材、授業方法を用い、生徒を常に新鮮な気分を保ち、授業にひきつけたという点ではうまくいったと思われるが、授業の形態としては教師45人の生徒というワンパターンな講義式にしてしまったのが残念だった。これでは対話練習は効果的にできない。したがって現在のような学級規模ではグループ、ペアで対話練習ができるような生徒集団を育成しなければならない。

高一英語リーダーの授業についてのアンケート

March 18, 1989

1 授業中にいろいろなことをしましたが、英語の総合的な力をつける（はかる）ためには次の活動は1～5のどれにあたるか（ ）内に番号を入れなさい。

1-全くだめだ 2-あまりよくない 3-ふつう 4-まあまあよい 5-とてもよい

- (1) 辞書の使い方を授業でわざわざ練習したこと (2) 予習のしかたを統一したこと
 (3) 予習がきちんとできているかチェックしたこと (4) ライトハウス英和辞典
 (5) 教科書 (6) 英熟語集 (7) スタディーガイド (8) ジミーコックス
 が授業に参加したこと (9) I have a dream. の暗唱 (10) ビデオをみたこと (NY, プレ
 スリーなど) (11) 発音練習 (1学期) (12) 発音とアクセントの関係 (2学期)
 (13) 単語のカードによる練習 (14) 教師の声の聞きやすさ (15) 評価のだしかた
 (テストと態度が半分ずつ) (16) 定期テストの問題 (17) 定期テストの聞き取り問題
 (18) 各課の内容に応じて学習方法を変えたこと (全訳, 重要な部分の訳, 訳無しなど)

2 今年度のリーダーの授業についての感想, および来年度の授業についての要望をできるだけ詳しく書いて下さい。

私は () 組 (男, 女) です。(クラス名を記入, 男女のどちらかに○をつける)

高一英語リーダーの授業についてのアンケート

項目	評価	1	2	3	4	5	平均
1		2	2 4	6 2	2 5	1 0	3. 1
2		2	2 5	4 3	3 9	1 4	3. 3
3		3	1 6	4 3	4 1	2 0	3. 5
4		4	1 1	4 6	4 0	2 3	3. 5
5		2	2 2	5 7	3 1	1 3	3. 2
6		2	1 7	4 2	4 3	2 1	3. 5
7		1	1 1	2 0	3 8	5 3	4. 1
8		1 3	1 4	4 7	2 3	2 8	3. 3
9		1 6	4 0	3 0	2 6	1 1	2. 8
10		9	1 4	4 2	3 4	2 6	3. 4
11		8	2 4	3 5	4 0	1 7	3. 3
12		4	2 4	4 1	3 9	1 6	3. 3
13		4	1 2	4 9	4 3	1 6	3. 4
14		5	6	3 8	4 4	3 0	3. 7
15		6	9	3 6	4 3	2 9	3. 7
16		0	9	6 0	3 7	1 6	3. 5
17		7	8	4 8	4 5	1 4	3. 4
18		3	1 0	3 3	4 1	2 0	3. 6

4. 終わりに

中学で行われたほうがよいと思われる指導（辞書のひき方、調音法、フォニックス）も今回は高校1年生に行った。名古屋大学附属中・高等学校は中、高併設とはいえ、完全な一貫教育ではない。中学各学年2クラス、高校各学年3クラスずつでしかも中学から高校へ全員進学できるわけではないので、高校生の半分強が

附属中学出身という状態である。中学と高校の間の英語学習のギャップを埋めるためには中1から高3まで6年間一貫教育の視点から総合的な英語の能力を育てる指導計画が組めるように制度を改めることが根本的な解決につながると思われる。1988年度高1になされた指導は現状においていかに中、高のギャップを解消するかへの試みであった。